

【論 文】

交替現象「1本([-p-)]」～「2本([-h-)]」～ 「3本([-b-])」はどう説明すればよいか？

高 橋 直 彦

0. 摘 要

本稿では、データとして「1本([-p-)]」～「2本([-h-])」～「3本([-b-])」等の交替に観察される形態音韻現象を採上げ、理論的枠組として「ひな形(照合)方式(Template-Matching Model = TM方式)⁽¹⁾」を援用した説明を試みる。

説明の際に則るデータ解釈上の基本方針は以下の点に要約される。

- (1) i. 本稿で扱う形態音韻現象は現代日本語という共時態における現象である。
- ii. 上記現象は形態音韻現象なのであって、純粋な音声現象と見做すことも純粋な音韻現象と見做すこともできない。その証拠に、「-本」と異なり、「-発/班」の場合は「1発/班([-p-)]」～「2発/班([-h-])」だが「3発/班([-p-])」であり、「-番」の場合は「1/2/3番([-b-])」であり、「-バック」の場合は「1/2/3バック([-p-])」である。
- iii. 「1発/班」は通常[-p-]だが「11発/班」等はずっとときに[-p-]～[-h-]という揺れを示すことがあり、また、例えば『東北学院報』は[-h-]だが略称の『院報』は[-p-]となるといった揺れも観察される。かかる現象がどのような形で説明されるのかといった問題も本稿の射程内にある。

⁽¹⁾ 筆者は、1988年にこの枠組を提唱して以来、これに依拠しつつ音韻研究を遂行してきている。この枠組の骨子は、構造主義(IA方式=異形態方式)・生成文法(IP方式=変更規則方式=書き換え規則方式)双方の難点を回避し、利点を活かす点にある。高橋(2011)の(1)「英語の複数形」に対する説明力の違い参照。「sign～signatureの交替」のムービー(簡略版)<<http://raspberrys.jp/sign.html>>、「日本語の動詞の活用」のムービー(簡略版)<<http://raspberrys.jp/kaku.html>>、他の部門への応用の例として「英語の受け身文の分析」のムービー<<http://raspberrys.jp/np.html>>も参照されたい。また、ひな形方式の音声レベルへの適用例としては佐藤(2012)を、文構造レベルへの適用例としては佐藤・小林(2013)を、それぞれ参照されたい。

1. 先行研究と TM 方式

稿末の参考文献や註(1)に挙げた筆者のこれまでの論考でも繰返し述べてきたように、構造主義流「IA方式=異形態方式」に基づく説明も生成文法流「IP方式=書き換え規則方式」に基づく説明も共時態に関する説明としては妥当性を欠くものであって、「TM方式」に基づく説明が多とされることになる。

参考までに、TM方式が理論構築・文法評価の際に則る作業原則を(2)に示し、「共時態に通時態を混入させてしまう」枠組の誤謬を(3)に示しておく。(議論の詳細は本稿では割愛する。)

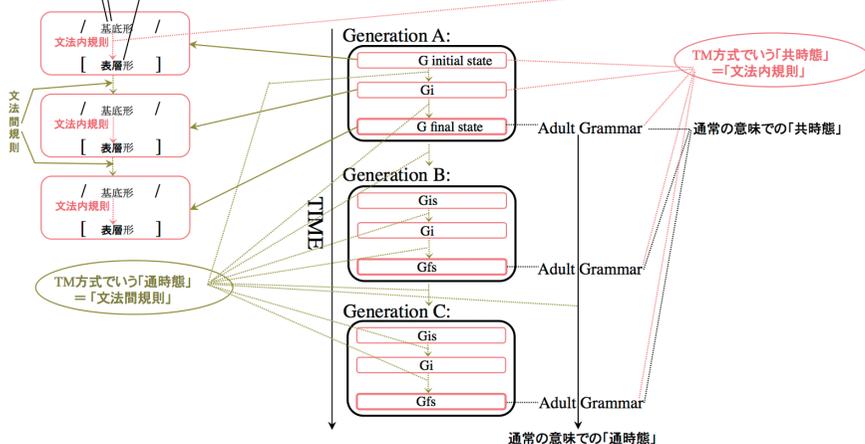
(2)

TM方式における理論構築・文法評価の際の作業原則(高橋(1995)の(28)と基本的に同じであるが、術語のみ一部変えてある。)

- (2) i. 通時態(=「文法間規則」)と共時態(=「文法内規則」)とは峻別せねばならない。
 通時態(=「文法間規則」)は基本的に「変更規則」を用いて規定されIP方式がなじむが、共時態(=「文法内規則」)はIP方式がなじまない。
 即ち、共時体系(=「文法内規則」)内の一般陳述としてはIP方式流に「変更規則」(=「書き換え規則」)を含んではならない。
 ii. 共時体系(=「文法内規則」)は一見IA方式がなじむように見えるが、それは表面的なデータの整理の上でのことで、データを説明するためには、IA方式流に「異形態」を無原則に設定してはならない。即ち、特例(iの原則が保持できない場合)を除き、「一つの意味に一つの形式」という原則を堅持せねばならない。

上の作業原則を遂行可能なものとするため、次のようなもう少し具体的な作業原則を設定する。

- (2) iii. iの原則に則り共時体系内に変更規則(=「書き換え規則」)を含まないようにするために、次の3つの原則を立てる。
 a. 基底形に記載する情報は最少(minimal)でなければならない。
 b. 音韻構造(素性階層構造・音節構造等)の「ひな形」がUGレベルと個別文法レベルで規定される。
 c. 基底形から表層形を導く派生の引き金として、Avoid Void(=AV)、「空白を避けよ」=MATCH(「照合せよ」という原理がUGレベルで想定される。これは「基底形をひな形に突合せよ。そして、ひな形に合致させるべく基底形の空白部分(埋めよ)」という要請である。この原理のパラメータの値が個別文法レベルで一定に組合わされて出来た操作群が、いわゆる個別文法レベルでの規則であるが、これは「指定規則」であって「変更規則」(=「書き換え規則」)ではない。
 ひな形方式では、基本的に、こうしたひな形照合操作(template-matching processes)の総体が派生(derivation)に他ならないと考える。



- (3) i. 言語は常に化するから通時態は変更規則を含まざるを得ないが、共時態に変更規則を認めてしまうと、「言語 L の文法 G の話者は、L の史的变化に伴い、時代が下るにつれて変更規則が増減し、G 獲得の困難度が増減する」という受容れ難い結論を回避し得ない。

- ii. また、「派生がある限度を越えて複雑になったり簡易になったりしたら、ある段階で

交替現象「1本([-p-])」～「2本([-h-])」～「3本([-b-])」はどう説明すればよいか？

しかるべき再編成が行われ、派生の簡素化や充実化が行われる」という救済策を考えたとしても、今度は、適度の複雑度/簡易度の規則体系とはどんな内容の規則を何個含む場合かという間に答えねばならず、また「再編成過程」なるものの中身に関する具体的な理論（さらには規則の順序付けに関する理論）を打ち立てねばならぬという非現実的な課題を背負い込む。

(3) で指摘した問題点は、「IP方式＝変更規則方式＝書き換え規則方式」の想定を大前提とする（現行の）生成文法が程度の差こそあれ一貫して抱え込んで来た問題点である⁽²⁾。誤解のないように敢えて付言しておく、TM方式では、通時態（≡ TMでは文法間規則：(2)参照）そのものを否定しているのではない。これを否定したのでは言語変化という厳然たる事実も、子どもの言語獲得過程における文法の変遷という厳然たる事態も説明できなくなってしまう。そうではなく、共時態（≡ TMでは文法内規則：(2)参照）と通時態とを理論的に不用意に混同することの致命的誤謬を指摘しているのである。要するに、通時音韻論と共時音韻論との理論的役割分担（棲み分け）を想定するのが筋である、という主張である⁽³⁾。翻って、構造主義流「IA方式＝異形態方式」の方はといえば、これはこれで詰まるところデータをただ「整理」しただけの段階に留まっているのであって、データを「説明」する段階にまで至っていない、という点がまさに問題なのである。

本論考では、こうしたIP・IA両方式の抱え込んだ問題点を持ち込まない方式として、TM方式に基づく代案を以下提示することになる。

2. TM方式による説明

以上から、妥当性を有する説明方式が則るべき、理論上の指針が想定可能となる。

(4) 本稿の被説明項である上記音韻交替現象に関しては：

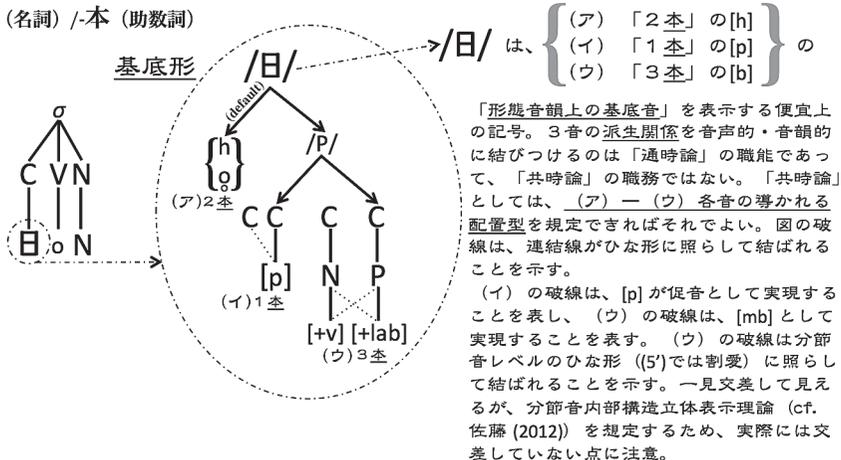
- i. 共時態（正式には文法内規則）(cf. (1i)) のレベルでは「変更規則＝書き換え規則」という概念を援用して定式化を行ってはならない。
- ii. 基本方針(1ii-iii)に則りつつも、音声的・音韻的因子に基づいて説明可能な側面は

⁽²⁾ 本来、「演算」が必然的に「変更規則＝書き換え規則」を含意するわけではない、という点を（現行の）生成文法は見誤っている、という点がポイントとなる。高橋（1995：60-61）、佐藤・小林（2013：§1.2.1）を参照。

⁽³⁾ 早い話が、例えば「箱」の[h]と「ゴミ箱」の[b]とを共時態レベルで書き換え規則を媒介に関連づけようとする枠組などはことごとく妥当性を欠く、ということである。

交替現象「1本([-p-)]~「2本([-h-)]」~「3本([-b-)]」はどう説明すればよいか？

本(名詞)/-本(助数詞)



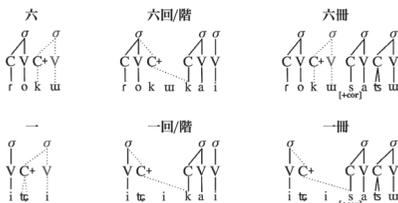
図は、まず、共時態の理論として「変更規則」に一切依拠することなく、ひな形に照らしてひな形どおりに連結線が引かれることを指示しているだけである (cf. (4i)) し、また、基底レベルでは「異形態」を一切想定していない (cf. (4ii)) という点に注目されたい。

因みに、図では特に「(-)本」の交替の方に着目した訳であるが、実は助数詞の前の要素「1-」や「3-」の方にも着目しなければならない。というのも、本稿の標榜する枠組での共時理論においては、「1-」や「3-」の示す「交替」に関しても「変更規則」にも「異形態」にも依拠しない形の説明が要請されるからである。実はこれも以下のような形で説明が可能である。

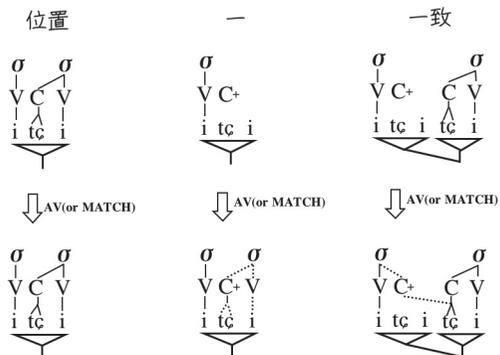
まず「1-」から。これは、交替を示さない「位置」と対比させると分かりやすい。以下を参照されたい。「位置」の「ち」と異なり、「1-」の「ち」は交替を示す (「一 (ip) 杯」~「一 (it) 旦」~「一 (ik) 回」~「一 (is) 冊」)。この「1-」を変更規則にも異形態にも依拠せずに共時理論で説明するとすれば、以下の図式のように想定すればよいことになる (基本的な点は、「8-」, 「6-」も同様である⁽⁵⁾)

(5''')

(5) ただし、「一体 (it-tai) vs. 「六体 (roku-tai)」, 「一冊 (is-satsu) vs. 「六冊 (roku-satsu)」等の対比に見るように、「6-」の場合は「後続音が [+cor] のときには促音にならない」という語彙的制約がある。下図参照。



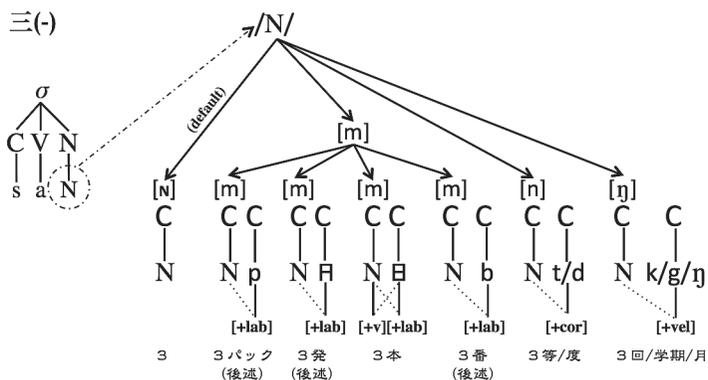
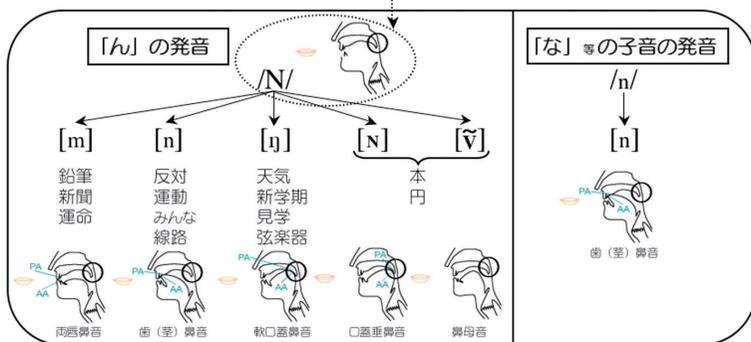
「位置」と「一」の「ち」は一見同じに見えるが、「一」の方は「-(p)杯」「-(i)且」「-(k)回」等と形を変える。



次に、「三 (-)」について。「三 (-)」も交替を示す（「三 (sam) 杯」～「三 (san) 段」～「三 (san) 月」）。この「三 (-)」を変更規則にも異形態にも依拠せずに共時理論で説明するとすれば、以下の図式ようになる。

(5''')

弁の調音の点で鼻音ということだけ指定されていて調音位置が未指定 (図では線なし) の抽象的なレベルの音。調音位置は後続閉鎖子音がある場合その子音の調音位置に「右倣え」する。



る。何となれば、このタイプにはそもそも交替がないからである。即ち、基底形と表層形が同じということで、「-番：/-b-/ → [-b-]」、「-パック：/-p-/ → [-p-]」となる。それ以上でもそれ以下でもない。

最後に、(8)について吟味検討しよう。

- (8) 「11 発/班」[-p-]~[-h-]、『東北学院報』[-h-]~『院報』[-p-]等の揺れ：このタイプも基本的には明快である。

一見同一に見える環境において揺れという異なったふる舞いを示すのは、実は厳密には同一環境にないからと目される。つまり、交替を示すケース同士(例えば、『東北学院報』と『院報』)を比較した場合、当該助数詞と直前の要素との間の緊密度にある種の違いがあると想定される、ということになる。これをいま何らかの具体的な記号を用いて便宜上表示するなら、例えば、『東北学院||報』対『院報』といった相違になる、ということである。記号「||」の入った『東北学院||報』の方が、記号「|」の入らない『院報』よりも緊密度が低く(言い換えると繋がりが緩く、つまりはその分独立性が相対的に高く)、そうした場合の方がデフォルト値(この場合[-p-]の方ではなく[-h-])が選択される、と考えればよい。このように、当該のふる舞いの違い(揺れ)を環境の違いという構造上の相違という因子に帰せしめることによって、その場限りのアド・ホックな形でない、直感的に妥当な説明が可能となる訳である。

3. 補 足

最後に、興味深いデータとして、数詞「10-」のふる舞いについて考えてみよう。「10-」に関してもある種の揺れが観察されるのであるが、この揺れは(8)のタイプの揺れとは異質のものである。(8)のタイプは「数詞」と「助数詞」との間の緊密度に違いがあるという点に起因するものであったが、「10-」の場合はそうではなく、「10-」自体の発音に揺れが存在するというものである。(9)を参照されたい。

- (9) 「十本」:「じっぼん」~「じゅっぼん」,「十回/階」:「じっかい」~「じゅっかい」,「十冊」:
「じっさつ」~「じゅっさつ」⁽⁶⁾,「十班」:「じっぱん」~「じゅっぱん」,「十手」:「じって」

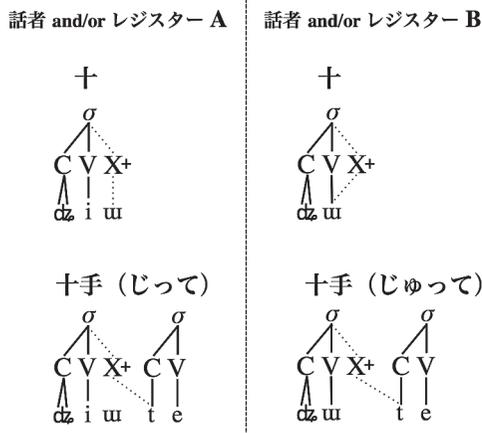
⁽⁶⁾ 誤読されることの比較的多い例として有名な、書籍の奥付に見る「10刷」は「じゅっさつ/じっさつ」

~「じゅって」等の揺れ

このタイプの揺れは、元々はいわゆる通時態に関わるものであって、「じっぽん」、「じっかい」等の方が実は歴史的に先行する、本来的な発音であった。しかし、この種の発音はいわゆる共時態においても少数派ながら依然として観察されるものである⁽⁷⁾。つまり、新旧両発音が現在共存しているという状況である。ただし、(9)のタイプは(8)のタイプとは異なり、「緊密度の違い」という構造上の因子に依るものではなく、「話者 and/or レジスターの違い」というパラ言語的な因子に依るものである。

(9)のタイプの発音が現在共存している状況であるということは、本稿の想定する枠組にとっては、「変更規則」にも「異形態」にも依拠せずに共時態として両者を共に説明せねばならない、あるいは少なくとも、説明できた方がよい、ということの意味することになる。(9')に本稿での分析を示す。

(9')



まず、「異形態」という概念に関して言えば、(9')に見る分析は「異形態」に依拠しているものではない、という点に気づかれない。というのも「異形態」というのは「形態音韻交替を表面的に整理した概念」であるのに対し、「じって」~「じゅって」等に見る揺れは上述のように「話者 and/or レジスターの違い」であるという点で全く異なった概念だからである。

ではなく「じゅうずり」である。(因みに、「じゅうずり」が「じっずり」にならないのは、日本語で促音は、少なくとも和語に関しては「無声音」が基本だからである。翻って、ではそもそもなぜ「-ずり」でなく「-ずり」なのかという点に関しては、前部成素「じゅう-」との緊密度を音形上明示する手立てである「連濁」に依拠した現象だからである (cf. 高橋 (2010a)), ということになる)。

⁽⁷⁾ 因みに、個人的な話になるが、筆者の父は「じゅって」等と発音し、母は「じって」等と発音していた。

それはちょうど「重複」を「ちょうふく」（やや古風）と発音するか「じゅうふく」と発音するかが「形態音韻交替を表面的に整理した概念」なのでなく「話者 and/or レジスターの違い」であるのと同様である。また、「変更規則」という概念に関しても、図に見るごとく、一切依拠していないという点に気づかれない⁽⁸⁾。

4. 結 語

以上本稿では、「1本（[-p-]）～2本（[-h-]）～3本（[-b-]）」等の交替データに観察される形態音韻現象を採上げ、理論的枠組として「ひな形方式 = TM方式」を援用しつつ、解釈上の基本方針（1）と作業原則（4）とに則った共時態 = 文法内規則のレベルの説明を試みた。

参考文献

- Hockett C. F. (1954) "Two Models of Grammatical Description", *Word* 10, 210-34; Joos, M. (ed.) (1957) *Readings in Linguistics*, American Council of Learned Societies, 386-99.
 —— (1955) *A Manual of Phonology*, Baltimore: Waverly Press.
 Itô, Junko (1988) *Syllable Theory in Prosodic Phonology*, New York: Garland Publishing.
 小松英雄 (1981) 『日本語の音韻 (日本語の世界 7)』, 中央公論社.
 Labrone, L. (2012) *The Phonology of Japanese (The Phonology of the World's Languages)*, The Oxford University Press.
 MaCawley, J. D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*, The Hague: Mouton.
 佐藤大樹 (2012) 「「ひな形方式」を援用した英語の交替形の考察：子音素性階層構造を中心に」, 東北学院大学教養学部総合研究. <<http://raspberrys.jp/sgkk.html>>
 佐藤怜美・小林維奈 (2013) 「ひな形方式に基づく英語の文構造再考」, 東北学院大学教養学部総合研究. <<http://raspberrys.jp/sgkk.html>>
 Shibatani, M. (1990) *The Languages of Japan (Cambridge Language Surveys)*, The Cambridge University Press.
 高橋直彦 (1990) 「音韻部門におけるひな形アプローチの妥当性について」, 『英語英文学研究所紀要』, 第19号, 東北学院大学, 29-88.
 —— (1992) 「文法内規則と文法間規則について」, 『英語英文学研究所紀要』, 第21号, 東

⁽⁸⁾ 「日本」が「にほん」～「にっぽん」と揺れるのも基本は一緒で、「話者 and/or レジスターの違い」である。例えば、スポーツの応援などでは「にっぽん」が多くなる。cf. 小松 (1981)。因みに、「にっぽん」の方がやや感情のこもった形式となる傾きがある。cf. 「やはり」～「やっぱり」。ただし、固有名詞の場合は事情が別で、個々のケースに応じて区々であり、当然のことながら著作権上勝手に変更して呼ぶ訳にはいかなくなる。e.g. 「日本生命 (にほんせいめい) vs. 「ニッポンレンタカー」。この註 (8) を書くに当たっては、東北学院大学教養学部言語文化学科3年生の柏啓祐君のコメントが役立った。記して感謝する。

最後に、七発「ななはつ」～「しちはつ」、一発「いっぱつ」、一「いち」、一丁「いっしょう」、一情報「いちじょうほう」、位置情報「いちじょうほう」等が本稿の枠組でどのように説明可能か、読者諸賢のご確認を期しつつ筆を措く。

交替現象「1本([-p-])」～「2本([-h-])」～「3本([-b-])」はどう説明すればよいか？

- 北学院大学, 33-70.
- (1995) 「現代日本語の動詞の活用」, 『東北学院大学論集 (人間・言語・情報)』第110号, 東北学院大学 107-78.
- (1996a) 「(英語) 音韻論に変更規則・変更規約は不要である」, 『東北学院大学論集 (人間・言語・情報)』第113号, 東北学院大学, 163-214.
- (1996b) 「英語の rhotics のふるまい」, 音韻論研究会 (編), (1996) 『音韻研究 理論と実践—音韻論研究会創立10周年記念論集—』, 開拓社, 127-8.
- (1997) 「いわゆる -ng (-) をもつ形式について」, 『東北学院大学論集 (人間・言語・情報)』第117号, 東北学院大学, 129-172.
- (2000) 「[弾音の生起環境]」, 『東北学院大学英語英文学研究所紀要』第29号, 東北学院大学, 67-114.
- (2005a) 「音韻理論における経済性 (Economy in Phonological Theory)」東北学院大学英語英文学研究所定例公開講演会 (2005年9月28日 東北学院大学泉キャンパス) における発表原稿.
- (2005b) 「純粋な「音韻論」は想定可能か?」日本英語音声学会 EPSJ 第7回東北支部大会 (2005年12月3日 東北学院大学土樋キャンパス) における発表原稿.
- (2005c) 「英語の否定接頭辞 in-, un- の形態音韻論」, 『東北学院大学論集』第142号, 東北学院大学, 53-75.
- (2008) 「ひな形方式の適用可能性」東北英文学会 (日本英文学会東北支部) 第63回大会 英語学・英語教育部門シンポジウム「言語理論の進展とその応用—言語教育・自然言語処理を手がかりに—」(2008年11月24日 東北学院大学土樋キャンパス) における発表原稿.
- (2009) 「英語における語頭の /j/ と語中の /j/ のふるまいの違い」, 『東北学院大学教養学部論集』第154号, 東北学院大学, 91-103.
- (2010a) 「連濁に対する (見かけ上の) 反例」, 『東北学院大学教養学部論集』第155号, 東北学院大学, 55-68.
- (2010b) 「ひな形方式に対する (見かけ上の) 反例」, 『東北学院大学教養学部論集』第156号, 東北学院大学, 95-104.
- (2011) 「英語音節再訪」, 『東北学院大学教養学部論集』第158号, 東北学院大学, 15-39.
- Vance, T. J. (1987) *An Introduction to Japanese Phonology*, SUNY Press.
- (2008) *The Sounds of Japanese*, The Cambridge University Press.